

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

マヤ興亡：文明の盛衰は何を語るか？

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5663

第一章 暦の予言

雨季が始まると、ジャングルはほとんど歩行困難になる。雨季の始まる前にはタヤサルに着かなければならない。スペイン人神父フエンサリーダとオルビータは、湿地や木々が立ちほだかる道を、イツア族の居城タヤサルを目指して、南に進んでいた。途中カリブ海側のバカラールに寄り、そこからは川をさかのぼって、ティプーに行く。そしてそこを拠点にして、タヤサルに向かう予定である。

一六一八年三月末、最後までスペイン人に抵抗するイツア族を、スペインの支配下におき、キリスト教に改宗させる苦難の役を、二人は自ら進んで引き受けたのであった。

北のユカタンの征服は、一五四二年、メリダの建設で完了していた。南のグアテマラは、ペドロ・アルバラードにより一五二三年から二四年にかけて征服された。それ以後、何度もマヤ人たちの反乱が起こったが、北と南は、一応スペイン人の支配下に置かれていた。しかし、マヤ文明がかつて一番栄えた真ん中のジャングル一帯は、イツア族やラカンドン族などの好戦的なインディオが、十七世紀になっても、スペイン人を寄せつけないでいた。

ユカタンの中心地メリダを出発した神父フエンサリーダとオルビータは、ただ神を信じ、神の言葉のみを武器にして、タヤサルに向かった。ティプーまでは、すでにスペイン人の支配下

にはいつて、キリスト教化されていた。しかし、時の総督フランシスコ・ラミーレス・プリセーニヨは、神父たちがこれから赴く地の野蛮な人々に殺されたり、何か不幸なことが起こったときの責任を逃れるため、彼らのために便宜をはかる公文書を何ら発行しようとしなかった。そのため神父たちは、行く町まちでの協力が得られるか心配のつる旅となった。だが、神父たちの行動を快く思わないのは、総督だけであった。メリダでは、司教や市民の支援が得られたばかりか、彼らの崇高な目的を知った人々は、どこでも彼らを歓迎した。裸足で進む彼らは、苦行僧のようであったが、前途の大業を果たそうとする強い意志をみなぎらせていた。

食べるものや着るものも満足になく、ましてや、川をさかのぼるための舟や道案内などたむ余裕などなかったが、バカラルに着くと、市長のアンドレス・カリリーヨは、舟や必要物資を提供してくれたばかりか、自らもティプーまで同行し、援助を惜しまなかった。

ティプーからは、まず、神父たちの目的をイツァ族に伝えるべく、ティプーのマヤ人を遣いにやらせた。それに応えて、イツァ王カネツクは二人の大将を使者としてよこし、歓迎の意を伝えた。すぐさま準備に取り掛かり、神父たちがタヤサルに向かったが、すでに八月十五日になつていた。

しかし、ティプーのマヤ人は、イツァ族への疑いや恐れをぬぐうことができず、さらに、もしイツァ族がキリスト教に改宗したら改宗したで、自分たちの地位を脅かすのではないかと心配になり、神父たちをタヤサルに案内したくなかったのである。神父たちは、途中ヤシユハ湖

にぶつかると、舟を造らなければ渡れない、トウモロコシの収穫もせまっているというマヤ人のために、一度ティプーに引き返すことを余儀なくされた。再度出発した神父たちは、今度はティプーのマヤ人のかりごとにより、道に迷わせられ、引き返すよう、説得された。だが神父たちは、困難にぶつかればぶつかるほど、神が助け賜うと勇気を奮い起こし、タヤサルへ向かう使命感は強まるばかりであった。その意を知った彼らは、神父たちをタヤサルに導くことに、もはやためらいはなかった。

目指すタヤサルに着いたのは、十月も中頃になっていた。予想以上の歓迎を受けた神父たちは、町を見て回る許可を得、さっそく布教を始めた。タヤサルの人々は興味深く、キリスト教の教えや賛美歌を聞いていた。だが、神父たちが神殿で馬の偶像を見つけたことから、事態は一挙に不穏になった。その馬の偶像は、ツイミンチャクと呼ばれ、稲妻と雷の神としてあがめられていた。それは、一五二五年、ホンジュラスへ遠征の途中にタヤサルに立ち寄ったコルテスが置いていった馬を偶像にしたものであった。

一五二一年にメキシコを征服したコルテスは、それから三年後にホンジュラスで起こった部下のオリッドの反乱を鎮圧するため、遠征隊を組織した。鎮圧部隊は、歩行困難なジャングルを横切るという、今の我々には想像できない道をたどり、やっとの思いでホンジュラスに着いて、目的を達したのであるが、その途中タヤサルに立ち寄ったのである。そのとき、コルテスとイツァ王カネックは会見している。コルテスは、キリスト教の素晴らしさを説いた。カネッ

ク王は賛美歌を聞き、華麗なる儀式に目を見張った。そして偶像を破棄することを約束した。そこでコルテスや神父らは、いかに神をあがめるかを教える人を派遣すると答えた。しかし、傷ついた馬を残してタヤサルを去ったコルテスは、その後二度とタヤサルに戻ることはなかった。また神父を約束通り、タヤサルに派遣することもしなかった。もしそれが行なわれていたなら、その時点で、イツァ・マヤの征服は完了していたかもしれない。

偶像をみたオルビータは、すぐさまそれを破壊した。キリスト教は、偶像崇拜を禁じているからである。神聖なる偶像を破壊されたイツァ族は、驚きに声をあげ、怒りをあらわにしだした。

しかしカネック王は、あくまで冷静で、寛容であつた。そこで神父たちは、意を強くして、カネック王を改宗させようと試みた。王は進んで神父の手から十字架を受けとつた。だが言つた。

「われらの神官がわれらの神をすてる時がやって来ると予言した時は、いまだ来っていない。いま時はニアハウである。いかに願おうとも無理である。時が来たる時にまたお越し願ひいたす」

イツァ族は、フエンサリダとオルビータの努力にもかかわらず、改宗することはなかった。偶像を壊されたイツァ族の怒りは増大し、神父たちは追われるように、タヤサルを去らざるをえなかった。

次の年も二人の神父は布教に赴いたが、一層怒りをかい、逃げるようにタヤサルを去った。次に布教に赴いたデイエゴ・デルガード神父の場合は、悲惨だった。彼は、マヤ人の風習にしたがって、胸を裂かれ、心臓を取られ、さらに体は八つ裂きにされてしまった。そして頭は杭にさされ、さらし物にされた。つづいて一六二四年、サクルムに駐留していたミロネスを長とする軍隊も、ミサの最中、インディオに襲われ、皆殺しにあった。

イツァ族の征服はその後中断し、征服が完了したのは、一六九七年三月十三日のことである。ときは、運命の「八アハウ・カトウン」が始まるほんの少し前であった。

新たな征服の事業は、メリダから道を建設することで始まった。一六九五年、ユカタンの総督マルティン・デ・ウルスアは、タヤサルへの道を造るために、北カンペチエのカウイチに、軍隊とインディオを派遣した。道を造る一方、神父達がタヤサルに派遣された。アベンダーニヨ神父らは、三日半の滞在中に、三百人以上の子供の洗礼を行なった。そして、マヤの暦に基づく子言を利用して、変革のとき八アハウはすでに来た、スペインの支配下にくだり、キリスト教を受け入れるよう、カネツク王らに説得した。しかし、すべての老人が洗礼を受けるときまでには、まだ四カ月ある、四カ月してまた来られたし、がその答えであった。

一六九五年の末には、道はタヤサルの北三二キロまで建設されていた。翌年初め派遣されたスピアウル隊は、しかし、予想に反して、攻撃をしかけられ、退却を余儀なくされた。もはや武力で征服する以外にはなかった。

一六九七年一月二十四日、カンペチエを出発したウルスア軍は、三月初めベテン湖岸につき、陣地が築き始められた。三月十日、タヤサルから多くの武装舟団が押し寄せてきた。だが先頭の舟には、白旗を掲げて和平を求めてきたカネック王の使者、神官キンカネックがいた。和平を求めるなら、二日後にカネック自身がここに出向き、食事を共にするようと、ウルスア総督は伝えた。しかし、イツア族は、女を送ったり、武装舟団を出して、挑発を繰り返すばかりで、カネック王はとうとうやって来なかった。

三月十三日、ウルスアは、一〇八人の兵と従軍牧師、召使い等を従え、夜明け前、建造したてのガレー船にのつて、タヤサルに向かった。ウルスアは徹底して、銃を使うなと命令した。しかし、度重なるイツア族の襲撃に、二人の兵士が傷を受けた。そのひとりバルトロメ・デュランは、我を失い、ついに引き金を引いた。それを機にいつせいに銃ははなたれ、戦いが始まった。火縄銃の大きな音にインディオは逃げまどい、湖面は泳ぐすきまもなくなるほどであった。戦いはまたたく間に終わった。八時半にはイツアの主島にイツア族は誰ひとりいなくなつた。イツア族のさしたる抵抗がなかったのは、自らの運命を知っていたからかもしれない。もっとも高い丘にはウルスア軍の勝利の旗が掲げられた。

かけ足で、スペイン人に最後まで抵抗したイツア族の歴史をたどった。そこにはスペイン人とマヤ人がぶつかりあつた大きなドラマがある。だが、ここで取りあげたかったのは、マヤ人

の運命觀が表われているところであつた。最初彼らはキリスト教を受け入れるよう説得されたが、「時ははまだ来っていない、今は三アハウのときである」と答えている。マヤ人は、彼ら自身の曆の予言にしたがつて、執拗にスペイン人の支配に抵抗してきた。マヤ人たちは、曆がもたらす周期的な運命論に支配されていたのである。

彼らの予言するその時は、目の前に迫っていた。彼らが征服されたのは、「八アハウ・カトゥン」が始まる少し前であつた。八アハウ・カトゥンの時こそは、彼らの曆に従うと、滅亡の時であつた。約二五六年ごとに周期的に巡ってくる八アハウ・カトゥンのいずれもが、滅亡の時であつた。彼らは、滅亡の時を知っていた。その逃れ難い運命に身を委ねざるを得なかつたのである。

もし、イツァ族が曆の予言するところにぴたりと合致して滅んでいたら、マヤ曆の恐ろしさを感ずるであろう。そのわずか数カ月前に征服されたところに、救いがある。だが、マヤ曆から西曆への変換が、まちがっているかもしれない。実際イツァ王カネツクがアベンダーニヨらに伝えた「四カ月後に来たれ」という日は、とつくに過ぎてゐる。イツァ族が用いていた曆では、すでに滅亡の時は来ていたのかもしれない。曆の予言通り、イツァ族は滅んだのかもしれない。それはもはやわからない。しかしマヤ人にとって、曆は未来を予言する力をもっていたばかりか、日常のすみずみまで規制する力をもっていたことは確かである。

ではその曆とはどのようなものなのか。曆がもたらす周期的な運命觀は、事実から演繹され

た、マヤの歴史と密接に関係したものでないだろうか。もしそうなら、マヤ文明の盛衰や滅亡を取り扱おうとしている本書に欠かすことのできないものである。

マヤの暦

マヤの暦は、いろいろ周期の異なる暦が組み合わさっているため、一見複雑に思える。しかし基本は、長期暦といわれるものである。イツァ族がもとにしたのは、それを簡略化した短期暦であるが、長期暦から説明しなくては理解し難いであろう。

長期暦は、ちょうど西暦と同じように、ある日を起点に数える暦である。起点となる暦元は、現在もつとも受け入れられている説に従うと、紀元前三二一年八月十一日である（グレゴリウス暦）。その日から、キン、ウイナル、トゥン、カトゥン、バクトゥンと呼ばれている単位で、過ぎ去りし日を数える。それぞれの単位の関係は次のようになる。

バクトゥン	一四四、〇〇〇日
カトゥン	七、二〇〇日
トゥン	三六〇日
ウイナル	二〇日
キン	一日

例として歴史的な日の一つあげてみよう。ちなみにこの日は、パレンケを繁栄に導いた大王パカルの誕生日である。

九・八・九・一三・〇　八アハウ　一三ポープ

これは暦元の日から、「九バクトウン、八カトウン、九トウン、一三ウイナル、〇キン」たった日が、二六〇日暦の「八アハウ」、三六五日暦の「一三ポープ」であることを示す。西暦に直すと、六〇三年三月二十四日となる。

九・八・九・一三・〇を日に直すと、 9×144 、 $000 + 8 \times 7$ 、 $200 + 9 \times 360 + 13 \times 20$ 日となり、暦元の日から一、三五七、一〇〇日たった日となる。こんな莫大な数をマヤ人たちは日常扱っていたのである。

八アハウ、一三ポープは、それぞれ二六〇日と三六五日で一周期となる暦の一日である。九・八・九・一三・〇を西暦の年に当たるとみると、これらは、ちょうど西暦の月日に当たるといってよいだろう。もちろん、仕組みは異なる。

二六〇日暦とは、一三の数と二〇の日が組み合わさってできる暦である。二〇の日は次のような順で繰り返す。

イミシユ、イック、アクバル、カン、チクチャン、キミ、マニック、ラマツト、ムルック、オック、チュエン、エツプ、ベン、イシユ、メン、キツプ、カーバン、エツナツプ、カワツク、アハウ

この順に一から一三までの数字がつくので、一イミシユ、二イック、三アクバル……一三ベ
ン、一イシユ、二メンとなつていき、二六〇日で一周期の暦ができる。

三六五日暦のほうは、二〇日が一単位の「月」が一八に、五日しかない不吉な日とよばれて
いるワヤツプがついてできる三六五日で一周期の暦である。一八ある月の順は、次のようにな
り、最後にワヤツプがくる。

ポーブ、ウオ、シツプ、ソツツ、セツク、シユル、ヤシユキン、モル、チェン、ヤシユ、
サツク、ケフ、マツク、カンキン、ムアン、バシユ、カヤツプ、クムク、ワヤツプ

それぞれの月は、○ポーブ、一ポーブ、二ポーブ……一九ポーブ、○ウオ、一ウオというよ
うに、過ぎていく。この暦の終わりのほうは、一八クムク、一九クムク、○ワヤツプ、一ワヤ
ツプ……四ワヤツプとなり、三六五日で完了する。その次の日は、もちろんもとに戻つて、○
ポーブとなり、とぎれることなく繰り返し返される。

この二つは、ちょうど月日と同じように、組みになって用いられる。たとえば、八アハウ—三ポープのごとくである。その日の次は、それぞれの仕組みに従って移っていくので、九イミ—シュ—四ポープとなる。

この長期暦といわれる暦は、マヤの歴史では、西暦二九二年から九〇九年まで使われた。その間、この長たらしい暦を省略して、簡単に記すことも行なわれるようになったが、イツァ族が用いていた短期暦も、長期暦を簡便にしたものの一種である。

さきに三アハウとか八アハウ・カトゥンとかいう言葉がでてきた。それは二六〇日暦とカトゥンの周期をうまく利用した暦である。長期暦では、その仕組み上、カトゥンの終わりはいつもアハウになる。アハウは二〇日ごとに繰り返すので、二〇で割れる日は、前記の歴史上の日にみられるように、アハウの日となるのである。しかしアハウにつく係数は一三で繰り返すので、カトゥンとの組み合わせであると、七、二〇〇÷一三＝五五三あまり一となり、一—ずつ係数は増えていく。たとえば、一・〇・〇・〇が一アハウなら、二・〇・〇・〇は一—二アハウ、三・〇・〇・〇は一〇アハウとなる。係数は一—一—二であるが、一—二に一一をたすと二三となる。だが係数は一—三までしかないので、二—三—一—三—一〇となり、一〇アハウとなる。

一カトゥンは、七、二〇〇日であり、二〇カトゥンで次の位のバクトゥンになるが、短期暦は、それとは別に、カトゥンと二六〇日暦の組み合わせだけを考えた暦であるので、七、二〇

〇と一三と二〇の最小公倍数で一周期の暦となる。すなわち、七、二〇〇×二三(=二二〇トウ
ン×二三)日、年に直すと、約二五六年ごとに、同じ係数の時が巡ってくるわけである。

この短期暦を時を数えるのに用いていたのが、スペイン人征服期のユカタンのマヤ人であった。イツァ族は、ユカタンから逃れて、グアテマラのペテン県のジャングルに囲まれた美しい湖、ペテン・イツァ湖周辺に逃れてきた人々であり、彼らもそれを用いていた。

イツァ王カネツクが神父たちに述べた三アハウ(カトウン)は、約二五六年ごとに巡っていくので、長期暦上のいつになるのか確かではないが、これまで受け入れられている説によると、一二・一・〇・〇・〇 三アハウ 一八カヤツブとなる。その日は西暦一六三八年六月五日であるが、三アハウ・カトウンは、その日までの二〇カトウンをさす。つまり一二・〇・〇・〇・一 六イミシユ 一四ソツツ(一六一八年九月十九日)から一六三八年六月五日までの期間をさす。ある期間の終わりの日でもって、その期間全体を表わすのは、一見不思議な気がするかもしれない。しかし世紀の呼び方と同じだといえ、なるほどと思われるにちがいない。

先の仕組みにしたがって数えていくと、三アハウ・カトウンの次は一アハウ・カトウン、その次は二アハウ・カトウン、さらに一〇アハウ・カトウンと時は過ぎていく。滅亡のカトウンといった八アハウ・カトウンはその次であり、西暦に直すと、一六九七年七月二十六日から始まり、一七一七年四月十二日までの期間をさすことになる。マヤ暦が予言する滅亡の時が始まるわずか四カ月ほど前に、タヤサルのイツァ族は滅んだのである。

滅亡の時・八アハウ・カトウン

ではなぜ八アハウ・カトウンは滅亡の時なのだろうか。その暦を使った歴史や予言は、『チラム・バラムの書』と称する書物に残されている。『チラム・バラムの書』とは、ユカタンのマヤ人が、スペイン人の征服後、習い覚えたアルファベットで、自分たちの伝説や神話、治療法、はては、スペインから伝わった物語などをユカテク・マヤ語で記したもので、雑多な内容の書物であるが、それぞれ発見された村の名前を冠して呼ばれている。これまで『チラム・バラムの書』として知られている書物は十指に余るが、現在利用できるのは、『チュマイエル』、『テイシミン』、『カワ』、『マニ（ペレス文書）』、『イシル』、『ナフ』、『テカシユ』、『トゥシツク』、『チャンカフ』の九つに過ぎない。このうち八アハウ・カトウンが滅亡のときであることを示した年代記は、『チュマイエル』、『テイシミン』、『マニ』の三つにみられる。三つに共通にみられる年代記の八アハウ・カトウンの部分を取り出してみよう。

八アハウ 二〇〇年のチチェン・イツアの支配の後、チチェン・イツアは放棄された。それからチャカンプトウンに行き、居を構えて、一三カトウンが経った。そこで敬虔なる人々、イツアは家をもった。

八アハウ チャカンプトウンは放棄された。一三カトウンの間チャカンプトウンはイツアの

人々により支配された。そして再び家を探し始めた。

一三カトウンの間チャキャンプトゥンに住まいした。そしてチャキャンプトゥンの道を失った。このカトウンに、イツアの人々は木の下、藪の下、蔓の下を進んだ。そこで苦しんだ。チャキャンプトゥンを失つてのち、六アハウと四アハウの四〇年、その後再び家をもった。

八アハウ チチェン・イツアの首長たちは、再び、居城から去った。チチェン・イツアのチャク・シブ・チャクに対するフナック・ケエルの謀りごとのために、マヤパン・イチパの首長の謀りごとのために。

八アハウ マヤパンは、壁の外、要塞の外の人により、マヤパンの町のなかに集められた首長達により、破壊された。

それぞれの八アハウがいつのことかは正確にはわからない。しかし、最後の八アハウのマヤパンが滅んだのは、十六世紀以後のスペイン人の記録などより、一四四〇年頃ということがわかってゐる。トンブソンらの現在一番受け入れられている説に従うと、それは、長期暦上の一一・一二・〇・〇・〇 八アハウ 三モルに当たり、西暦では一四四一年四月二十日から一四六一年一月四日のあいだとなる。八アハウは二〇×一三カトウンごとに繰り返すので、それぞれの八アハウが、一周期前ごとの八アハウだとすると、最初の八アハウは六七二年〜六九二年、次の八アハウは九二八年〜九四八年、チチェン・イツアが二度目に滅んだ八アハウは、一一八

五年〜一二〇四年となる。チチエン・イツアが滅んだ年は、考古学からは一二〇〇年頃とされ、考古学のデータとも一致するが、それ以前の八アハウの記録に関しては、よくわかっていない。一三カトゥンごとに歴史はが繰り返すのは、チチエン・イツアの滅亡、マヤパンの滅亡から導き出され、それ以前は、歴史の創作かもしれない。

だがマヤの歴史区分とこの短期暦の長さを比べると、同じような長さであることに気がつく。定住生活の始まりから、スペイン人の征服期までの時代を挙げると、次のようになる。

形成期 前期（紀元前二〇〇〇年〜前九〇〇年）

中期（前九〇〇年〜前三〇〇年）

後期（前三〇〇年〜紀元後二五〇年）

古典期 前期（二五〇年〜六〇〇年）

後期（六〇〇年〜九〇〇年）

後古典期前期（九〇〇年〜一二〇〇年）

後期（一二〇〇年〜一五〇〇年）

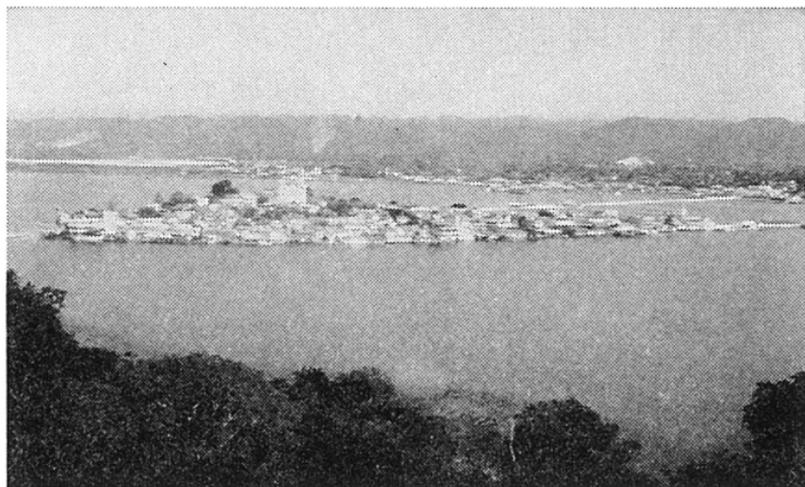
西暦年数に関しては、若干意見の食い違いがあり、また古典期の前に原古典期を置いたり、古典期を前期、中期、後期、終末期などに細分する意見など、いくつか異なる意見があるが、

さしあたり、この時代区分を利用してみよう。

古典期というのはマヤ文明がもつとも栄えた時代であるが、その頃より、短期暦とほぼ同じ位、三〇〇年ほどで、区切られている。マヤ人たちは、そういう文明の盛衰の期間と暦を調和させる努力を行なったのかもしれないし、暦のなかに、その一致を見いだし、その不思議さに驚き、それを体系化させたのかもしれない。その考察は、マヤ文明の崩壊の原因を考えるとこゝろで、もう一度取り挙げることにし、ここでは、暦はマヤ人の自然観、歴史観を探るうえで、欠くことのできないものである、とだけ言っておきたい。

タヤサルの謎

タヤサルが滅んで三百年あまりたった。マヤの歴史に比べれば、たったの三百年である。しかし、タヤサルの正確な位置がもはやわからない。タヤサルと呼ばれる遺跡は、ペテン・イツァ湖の半島にある。イツァ族の末裔も、わずかではあるが、その周辺に住んでいる。にもかかわらず、それが本当にタヤサルなのかいまだに論争の的になっているのである。文献のある歴史時代でもこのようなことが起こる。ましてスペイン人の征服以前の歴史となると、わからないことのほうが多い。幸いマヤ人は文字をもっていた。歴史を記していた。だから、無文字社会の歴史に比べれば、はるかに歴史を再構成しやすい。しかしその文字にしても、解説が進んできたとはいえ、わからないことのほうがまだ多い。どうしてマヤ文明が滅んだのかもわからない



写1 タヤサルの遺跡があったというベテン・イツァ湖のプロレス

い。マヤ文明の盛衰を述べるために必要なマヤ以外の人々との関係、たとえばチチェン・イツァとトゥーラの関係やマヤとテオティワカンの関係など、わからないことばかりである。

とはいえ、この二十年ばかりのマヤ学の進歩は著しい。研究者が増え、非常にたくさんの研究が発表されるようになり、以前に比べると、はるかによく歴史が描けるようになった。そうした文献を利用しながら、マヤ文明の盛衰を述べていこうと思うのである。